

第一章 挑戦の書としての『神学大全』

- 1, 2 『神学大全』は知的、学問的なゴシック・カテドラルに譬えることができる
by A. パノフスキー『ゴシック建築とスコラ哲学』ちくま文庫

対決・論戦・挑戦の矢面に立たされたトマス

パリ大学時代の論戦(対立する学派に対して)

1256年『神の礼拝と修道生活を攻撃する者どもに対して』

1270年『霊的生活の完全性について』

『知性の単一性について—アヴェロス派に対して』

『世界の永遠性について—つぶやく者どもに対して』

- 3, 4 キリスト教世界、カトリック教会に対する「不信仰者」「異教徒」に対して
トマスの真意

1) 人間理性によって探究される哲学的諸学問の他に理性的探求の射程を越えて
神的啓示にもとづく教え、すなわち、聖なる教え (sacra doctrina) が
人間の救い (humana salus) のために必要である

2) 人間がよく生きるためには理性を最大限働かせて知恵を探究するだけでは足りず
神の神的啓示に心を開き信仰に基づき、知恵と真理を探究すること

5. 『神の視点の下に』『神を根拠として』

聖書は、神の教え (sacra doctrina)

神の語る言葉として読むべき

『神学大全』はその準備であり、導きの書である

聖書を神の意図に即して忠実に読むための学びであり、探究である

また、神学は、神に近づき教えの根源である神自身の中へ入ってゆくことを支援するものである
人間の力では不可能なことを信仰という神の恵みに頼りつつ試みるのが聖なる教え・神学である

- 6, 7, 8 トマスの『神学大全』の聖なる教えの主題

- 1) イエス・キリストとの真実の

パーソナルな出会いをめざすことを通じて神の知恵を探究しているのであり、
イエス・キリストと真実に出会うためには、聖書を神の言葉として読むことである

- 2) 『神学大全』で説く聖なる教えは、

(キリスト教徒だけでなく) 万人に対して知恵と真理の探究であるかぎり他の諸々の学の探究と
探究としては同列である

聖なる教えは学であるかぎり万人に学ばれ理解されることが可能である

(キリスト教徒が) 神の啓示に心を開いても学的性格を破壊してはならない
また、キリスト教徒だけの独占的、特権的「体験」ではない

3) 信仰と理性は

安易に妥協・調和させられたり混同されたりすることはない
むしろ、それらは極度に緊張を孕み厳格に区別され
信仰にもとづく、理性的営みにおいて統一されるのである

3) 従って、稲垣先生は、バートランド・ラッセル(1872~1970)の言説を批判

「神学者トマスが哲学する場合、結論はすべて彼が信仰をもって受け入れている教義において
先取りされているので、彼を真正の哲学者とは認めがたい」

C. S. パース(1839~1914)も同じく知的遊牧民・放浪者と批判

9, 10 なぜ挑戦の書なのか

1) グラープマンの『聖トマス・アクィナス《神学大全》入門』

現代の研究者にとって神学(教義、倫理、神秘)の分野のみならず
哲学(認識論、心理学、政治、法理論 etc.)の分野においても洞察と示唆に富む
「高貴で卓越したトマスの知的生命の中核そのものを構成している」

稲垣先生によれば、『神学大全』から貴重なことを学ぶだけでなく重大な挑戦の書として読むべき

2) 人間理性のみによる探究の射程を越えて

神的啓示(聖書)にもとづき信仰の光に導かれつつ知恵と真理を探究することが
人間の救いのために人間が善く生きるために必要である

3) 『神学大全』

(1) 第一部 万人が、自らの全存在が第一根源の神に依存し

自らの生が神へと秩序づけられている

神は神自身の存在を万物に分与する愛と交わりの神である

(2) 第二部 人間は自らの救いと幸福をめざして

神の啓示(聖書)に心を開き人間性を完成する道としての徳は究極的には愛であり

それは愛である神の本性に与ること(分有)であり「神になる」ことの洞察である

4) 第三部 「神になる道」「人間本性を完成する道」は

人となった神であるイエス・キリスト自身が啓示したもので

トマスの探究の記録は救い・幸福への道を歩む万人に対して

道づれとなる卓越した「人生の地図」といえよう

11. 稲垣先生の「挑戦の書」としての3つの視点

1) 「問題としての神」

現代人は実践的、理論的に、探究すべき、解決すべきさまざまな問題を抱えているが
それらの問題の中でいちばん大きく、緊急な問題が「問題としての神」である

注) 稲垣先生の『問題としての神』創文社刊

『神学大全』は、問題探究、解決の導きの古典である

2) 探究全体の基礎である「存在」理解の問題

知恵と真理の探究の為に存在論の「ペルソナ論的転回」の洞察、直感を回復すべきである

「存在」とは、知と愛によって自らに完全に立ち帰るペルソナの「存在」である

3) 社会哲学、政治哲学における「共通善」概念の復権

(1) 近現代の社会哲学、政治哲学

人間は自然本性的に利己的であり近現代の社会秩序、社会システムは人間中心主義の効用 (快樂と物の豊かさ)の最大化を目的に構成化されている

(2) トマスの社会哲学、政治哲学

人間の自然本性には、知と愛の神の認識が刻印されており、人間の社会的本性には、「共通善」(bonum commune)にもとづくペルソナの共同体(communitas)、人間社会建設への欲求が刻印されている